





特集

# 大規模地震から2年、被災地の現在 ～ミンダナオ島マキララ～

from フィリピン・ミンダナオ島マキララ

今から2年前の2019年10月、フィリピン南部に位置するミンダナオ島コタバト州マキララ町付近で、マグニチュード6を超える地震が3度にわたり発生し、その後も数ヶ月余震が続きました。当時の国連人道問題調整事務所の報告によると、この一連の地震の被災者は約35万人、家屋の全壊2万5800棟、半壊2万1800棟、103の避難所に約6万人、その他の場所に13万人が避難生活を送っているとありました。

マキララ町では10万人が被災、多くの建物が全半壊し、土砂崩れ、地

## 緊急救援から復興に向けて

ドンボスコ財団は、  
自身も被災しなが

ら、周辺地域を始め6つの町で早期に緊急救援活動を開始し、延べ4000人以上に食料配布を実施しました。地震によって集落が立ち入り禁止区域に指定された人びとの一部には、ドンボスコ財団のバランゴン畑を一部避難所として提供しました。また、仮設住宅建設用の資材や、衛生的な暮らしができるよう便器やホースを提供しました。仮設住宅周辺では、家庭菜園での野菜づくりを奨励し、有機農業の研修なども実施しました。その結果、地域の人びとがより自然に即した農業に関心を持つようになりました。自家消費以上のものができた場合には隣人と物々交換をしたり、地域の市場に出荷する人もいます。ドンボスコ財団の避難所に移り住んできた2つの集落の62家族は、政府による再定住地を提供されるまで待機予定です。

近隣地域での支援活動も、食料配布に留まりませんでした。マキララ町は山の中腹に位置し、豊かな水があります。以前は湧き水による水源が6つありましたが、地震により水源に影響が出たため、

## ドンボスコ財団の施設の再建

ドンボスコ財団は若者に向けた有機農業の研修を実施してきましたが、その事務所や研修施設は全壊し、その上、元々それらの建物があつた地域は断層があるため、建設禁止区域に指定されてしまいました。そのため別の敷地に新たに事務所、研修用の施設や食堂などを建設しました。そこで使用している建材は主に木材や竹などの自然素材です。自然素材を用いることにより、建物が崩れた場合でも、人的被害を最小限に抑えるという考え方からです。2年前の地震で、2階建てのコンクリートの村役場の1階部分が完全に崩れて、死者や負傷者が出ていたことを教訓としています。

これらの支援活動には、日本やヨーロッパ、地元の協力者などからの支援金が活用されています。

ドンボスコ財団では、現在はまだ研修活動が再開できていませんが、生産者や研修生は再開できる日を楽しみにしています。

赤松結希(あかまつ・ゆき／ATJ)

割れなどが発生しました。バランゴンバナナはマキララ町からも出荷されており、近隣のバタサン村やブハイ村などに生産者がいます。幸いバランゴン生産者や出荷責任団体のドンボスコ財団の関係者で命を落とした方はいませんでしたが、怪我人が出たほか、ドンボスコ財団の事務所や研修棟などは全壊し、スタッフや生産者の家屋にも大きな被害が出ました。

新たな水源から水を引くパイプやホースの提供なども実施しました。

地滑りなどによりバランゴンバナナに被害を受けた生産者に対しては苗を供給しました。また、地震があってもドンボスコがバランゴンの出荷を継続している状況を見て、新たにバランゴン生産に取り組む人も出てきました。

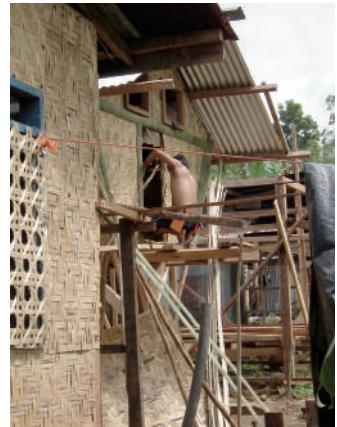
政府が用意した避難所の中には、大手企業のバナナプランテーションに囲まれているところもあります。そこでは農薬が日常的に散布されているため、住民は農薬の飛散に晒されており、早期の移転が必要です。避難所にいる先住民族のバゴボ・タガパワ族の人たちについては、国が認める先住民族の土地に戻れるように手配中です。



仮設住宅地での野菜づくり



倒壊したドンボスコ財団の施設

自然素材を使って  
家づくりをする住民